アートの景色 美術 '96

パブリックアートの民主主義

作家と住民の相互理解が不可欠

村田　真

「ファーレ立川」と「新宿アイランド」のオープン以降だろうか、ここ1、2年、パブリックアートへの関心が高まっている。今年に入ってからも、東京の臨海副都心では、国際展示場（ビッグサイト）前にクレス・オルデンバーグによる巨大なノコギリや、お台場にダニエル・ビュレンヌによるカラフルなゲートが相次いで完成し、話題を呼んでいる。

これらは、以前よく見かけた（今でも見られるが）おきまりの裸婦像やパターン化した抽象彫刻に比べて、とても斬新で見映えがいい。たしかに最近のパブリックアートは、彫刻界の長老やランドスケープ専門家に代わって、一流の現代美術家が参入してからカッコよくなった。だが、なんとなく違和感がないわけでもない。なぜ新宿に「LOVE」の文字が立ち、埋め立て地に西洋ノコギリが突き刺さっていなければならないのか、と。

一流アーチストを指名するのは結構なことだが、しかしパブリックアートは美術館に展示する作品とは違って、その地域の住民に対するこのような配慮は、今後日本でもより重要になるだろう」と指摘されている。

いいかえれば、「だれが」「なにを」つくるかより、「だれのために」「どのようにして」伝えるかが重視されなければならない、ということだろう。

こうした傾向はなにもアメリカに限ったことではない。日本でも独自の方法で〝民主的〟にパブリックアートを進めている例がある。そのひとつは、愛知県岩倉市で進行中の「音のアート」。名古屋市郊外に位置する岩倉市はナゴヤシティ管弦楽団に練習場を提供したことから、「音」と「コミュニティ」をテーマとするパブリックアートを設置することになった。ここで重要なのはいうまでもなく「コミュニティ」のほうである。

岩倉市では、これまでのパブリックアートにおいて問題になってきた「地域住民の不在」を反省し、設置過程で周辺に住む人たちの協力と参加を求めることにした。そのため、アーチストを選考する設置委員会のほかに、大学の研究者や地元住民らでワーキンググループが組織され、イベントやワークショップを通してアーチストと地域を結ぶ役割を担った。これまでに4点の作品が完成し、今年度さらに4点を追加していく。

たとえば関本幸治の作品。一見、ありがちなステンレスによる抽象彫刻だが、よく見ると3カ所にボタンが付いており、押すと近所から採取した子どもたちの声が流れてくる仕掛けだ。島袋道浩の作品は、ただの丸い台座。「こんなのあり？」とも思うが、彼はある期間ここに来て、台座の上に作品を置いたり、仲間と一緒に演奏会を開いたりする。いわば可能性だけを乗せた動的な舞台なのだ。

いずれの作品も小規模だが、住民と等身大であるためかえって親しみやすいともいえる。設置委員で名古屋芸大助教授の茂登山清文氏は「オープンなかたちで市民に参加してもらうため、設置に際してワークショップを開くなどプロセスを重視した」と話す。

もうひとつは、川俣正が福岡県田川市で計画している「コールマイン九州」だ。7月4日本紙夕刊でも報じられているので詳細は省くが、要するに旧炭鉱地に塔を築き、日本の近代化を問い直そうというプロジェクト。ここで注目したいのは、川俣の目的は塔を建てることでなく、田川市民と連携し共同で作業を進めていくというプロセスの方にあることだ。従って、「スケールや形はそのつどの話し合いから生まれ、変化していくものと考えている」。

実際に作業に入るのは来年以降になりそうだが、毎年1カ月ほど滞在して住民とともに組み立てていき、完成するのは10年、20年後、あるいは完成しないかもしれないという。「完成を目指すのではなく、ガウディのサグラダ・ファミリア教会のようにつくり続ける意志を持続させるだけで、町は活気づく」とも語っている。これをパブリックアートと呼ぶなら、まさに前代未聞のパブリックアートになりそうだ。

さて、以上の2例は意図も規模も異なっているものの、その過程において住民がなんらかのかたちでかかわり、〝民主的〟に進めようとしている点で共通している。しかし、パブリックアートにおいて民主主義を強調すればするほど、南條氏も危惧するように作品の質がおろそかになり「社会福祉や政治の道具」にもなりかねない。そうならないためにも、アーチストと住民との相互理解が不可欠であり、それが両者の創造的な共同作業を可能にするはずである。

パブリックアートとは、そこに住む人たちにとっては地域と芸術のことを理解するためのひとつの契機であり、またアーチストにとっては、社会性を回復するためのリハビリテーションの場といえないだろうか。

（むらた・まこと＝美術ジャーナリスト）

これもパブリックアート――島袋道浩氏の作品本体はペンギンの置いてある台座の方

1996/8/15　毎日新聞（夕刊）

街角の芸術作品 住民と溝

批判受け設置中止も◆親しみやすさ追求の動き

街角の広場や公園、道路わきにたたずむ彫刻――。「パブリックアート」が、大都市だけでなく、中小の自治体にも広がっている。一方では「そんなものいらない」という住民の声に押されて設置を見直すなど、彫刻と地域の“摩擦”も生じている。そうした溝を埋めようと、作品と地域住民のかかわりを模索する新たな試みも登場した。

パブリックアートとは、不特定多数の人が鑑賞できる公共的な空間に置かれる彫刻などの芸術作品。東京の「新宿アイランド」や「ファーレ立川」が有名だが、一九八〇年代以降、特色づくりの一環として取り組む自治体が目に見えて増えてきた。

愛知県もパブリックアートが盛んな地域だ。だが県内の先駆け自治体のひとつ碧南市は、十三年間続けてきた彫刻設置を今年、休止した。

同市は「彫刻のあるまちづくり」を掲げ、二期二十年計画で、八三年度から毎年一点ずつ彫刻を設置してきた。地元の美術家や教師らで構成する部会で設置場所を決め、外部の専門家中心の選考委員会が作家を選ぶ方式だ。

これまでに、先端を磨いた自然石を渦巻き状に配置した先鋭的作家グループ・環境造形Qの「スパイラル」や、未来への飛躍をイメージした澄川喜一氏のオブジェ「TO THE SKY」など、抽象作品を中心に十三点を各所に設置した。作品のレベル、年間二千万円の事業費とも、地方の自治体としては高い。

事業中断のきっかけは、今春の市長選で、新顔の三候補全員が「見直し」や「反対」を掲げたことだ。背景には彫刻に対する市民の疑問や批判があった。

元市幹部で事業推進側の立場にあった永島卓市長は「具象作品はまだいいが、抽象作品には『理解できない』『それより福祉に金を使え』という声がある。広く意見を聞いて再検討したい」と休止の理由を説明する。

選考委員の酒井忠康・神奈川県立近代美術館長は「芸術の効果は目に見えず難しい面があるが、利便や利益だけで判断すると暮らしはそっけないものになってしまう」と指摘する。

八六年から彫刻設置を続ける愛知県半田市では、住民から彫刻を移設してほしいという要望が出た。

同市は、専門家らによる選定委員会が作家と場所を決め、ほぼ毎年一、二点ずつ彫刻を設置してきた。ところが九一年に児童遊園地に置いた彫刻に対して、地元の七区長が連名で「遊び場が狭くなった。よそに移してほしい」との要望書を出した。市は今年、作家と連絡をとって移設の検討を始めた。

問題の場所は、小さな児童公園。その中央に京都府の藪内弘氏の作品「ああした天気になーれ」がある。げたの形の大きな御影石の彫像がゴロンと置かれたユーモラスな具象彫刻だが、近所の主婦は「事前に話はなかった。子供がボール遊びをする場所もなくなった。置くならよそにしてほしい」。

市は「子供に夢を与える造形として置いたが、住民との意思疎通が十分でなかった面がある」と話す。

自治体の彫刻設置は、選考委員会方式のほかに、公募展やコンペ方式、散在か公園などへの集中配置かなど様々なスタイルがある。

しかし、作品と場の雰囲気がかけ離れていたり、公募で集まったからと置いたりするやり方が「彫刻公害」という言葉を生んだ。「だれのために、なんのために置くのか」が問い直されている。

碧南市も半田市も、作家は設置場所を訪れた上で作品制作にとりかかり、設置後も市民が彫刻に親しむ事業を開いている。だが、古い街並みや保守的な生活意識と新奇な現代美術が今後どんな関係を築いていくのか、なかなか見えにくい。

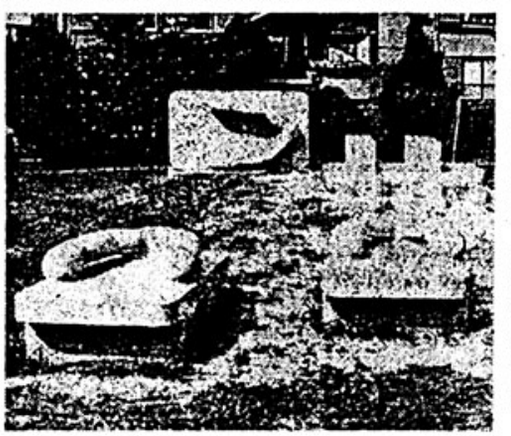
そんな中で、ユニークな試みをしているのが愛知県岩倉市の「音のアート」だ。

同市は、昨年と今年の二年計画で歩道に八点の「音の出る彫刻」を設置する。最大の特徴は、作家・作品と地域のかかわりを重視した点だ。

例えば、子供時代に遊んだコンクリート土管を思い起こさせる岡山県の浜坂渉氏の作品「音響の台座・IX」は、市民参加のワークショップでいろいろな音響を体験し、その経験を構想に生かした。愛知県の関本幸治氏の作品「かがみのくににようこそ」からは、地元で集めた子供たちの声が流れる。

設置委員長の茂登山清文・名古屋芸大助教授は「作品の選択権を地域の側がもつことが重要だ。プロセスを大事にして作家自身も住民とのかかわりを考える。パブリックアートは、美術と社会・住民が接触する場であり、美術自身への問いでもある。近代以降発展してきた美術の特権性を敵対視しつつ、どう連続性を獲得していくか。住民が関心を持つような仕組みをどう作っていくかが課題だ」と語っている。

（吉住　琢二）



【右上】一般に、抽象作品は市民の人気がないといわれる。碧南市民病院前の「スパイラル」＝碧南市平和町三で【右下】住民から移設を求められている児童公園の彫刻「ああした天気になーれ」＝半田市乙川町で【左】ボタンを押すと子供の声が流れる「かがみのくににようこそ」＝岩倉市中央町一で

朝日新聞　1996/9/13

パブリックアート変革期

地域に融け込む手段模索

パブリックアートが新たな段階を迎えている。公共スペースを彫刻などで彩る「装飾」の発想から、地域の特性や住民の意思を反映した「コミュニティーづくり」へと踏み込む機運が高まってきた。芸術か公害か、が問われる中、社会におけるアートの存在意義を見つめ直す契機ともなっている。

横浜市の上大岡駅前に先月、一部開業した複合ビル「ゆめおおか」。吹き抜けや歩道など建物内外の十九カ所に、日本を含むアジアの若手現代作家のアートを設置するプロジェクトが進んでいる。すでに八点が公開され、残る作品もビル全体が完成する来年三月までに配置される計画だ。

天井からつるされた彫刻。かつての街の姿を転写した（横浜市の上大岡駅前の「ゆめおおか」）

道しるべの機能も

この事業のアートプランナーを務める美術評論家の南條史生氏は、地域の歴史性や土地の固有性を念頭に立案したことを強調する。「脈絡なく作品を置いたり、他と同じような体裁だったりしては意味がない。町の個性に合わせていかに構成するかが、いま求められている」という。

象徴的な例が本の形をした彫刻。昭和三十六年当時の風景写真などを表面に転写した作品で、地元の歩みを語りかける。

上大岡は交通の拠点で郊外の住宅地でもあるが、屋上の換気塔を覆ったブルーの巨大彫刻は道しるべの機能も果たしている。何げない階段や柱には哲学的な言葉を記したアートを忍び込ませるなど、様々な作品が上大岡の顔づくりに寄与している。

南條氏は昨年、新宿アイランドのパブリックアートを手掛けた。今回はそれ以上に「いろんな選択肢を用意し、地域の代表らと協議を重ねアイデアを固めていった」と打ち明ける。住民の声にも耳を傾けることで、アートの一方的な露出を避けるためだ。中には地元団体からの寄贈作品も含まれている。

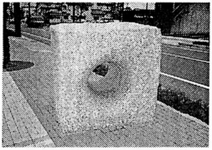
背景には、さまざまな問題を抱えたパブリックアートの現状がある。豊かな町づくりに必ずしも直結しない企画の画一性やメンテナンスの不備に加え、アート公害という言葉が物語るように住民の共感を得られていない作品の存在が問われている。

また作品の移転を求める声もあがっている。愛知県の碧南市では十三年前から続けていた野外彫刻事業を市民の要望や財政事情を理由に今年から中止した。ブームとは裏腹に見直し論議も噴出してきた。

市民参加を大前提に

長年この分野の調査に携わっているパブリックアート研究所代表理事の杉村荘吉氏は「専門家と住民の認識がかけ離れている」と指摘する。

一方的な露出より　住民の理解が必要



「子供のころ音の体験を楽しんだ土管をイメージした」という浜坂氏の作品（愛知・岩倉市）

同県の岩倉市が「音のアート」と銘打ち、昨年から幹線道路を舞台に始めた事業は、そんな事例を反省材料に市民参加を大前提にしている。キーワードになっているのは、同市が数年前、ナゴヤシティ管弦楽団に無償で練習場を提供したことを契機に音楽による町づくりを進めているためだ。

作家選定など基本作業にあたる設置委員会と別に、地元住民や大学院生らで構成するワーキンググループを組織。このグループはいわば作家と市民のパイプ役で、作家の制作を手助けしたり、市民に対してはワークショップを通して事前に事業内容をPRしたりしている。

「わかりやすい具象彫刻を求めるのが市民の一般感情。ただ、それだけでは岩倉の特色は浮かんでこない。現代美術作家が独自に『音』を解釈した作品は難解でも、その意図を前もって市民に説明すれば理解が深まる。親近感もわけば、自宅前を掃除するように作品を大切にする意識も芽生えるのでは」と同市都市計画課工務係長、大堀誠三郎氏は期待する。

これまでに四点、そして今年度中に新たに四点を取り付ける予定だが、ワーキンググループとのコラボレーションは一面で作家自身への問題提起ともなっている。

浜坂渉氏は「自分のアイデアとともに、住民の気持ちも無視できない。公の場でのアートのあり方を改めて考えるきっかけになった」と感想をもらす。藤本由紀夫氏は「作品の表現を決めていくアプローチの仕方が異なってくるし、刺激的な企画」と語る。

求められる物差し

パブリックアートは開放的な場で気軽に鑑賞してもらう文化的狙いがあり、街の景観美化の手段としても用いられる。

いずれにしても、実質的な住民との対話の欠如を問題視する関係者は少なくない。杉村氏は「『だれのために、なぜ設置するのか』という理念や目的をはっきり定めなければいけない。パブリックアートの印象は人それぞれで価値判断が難しいが、住民が納得できるような物差しづくりも必要だ」と提言する。

文化部　坂本憲一

岩倉の市道に設置の『音のアート』

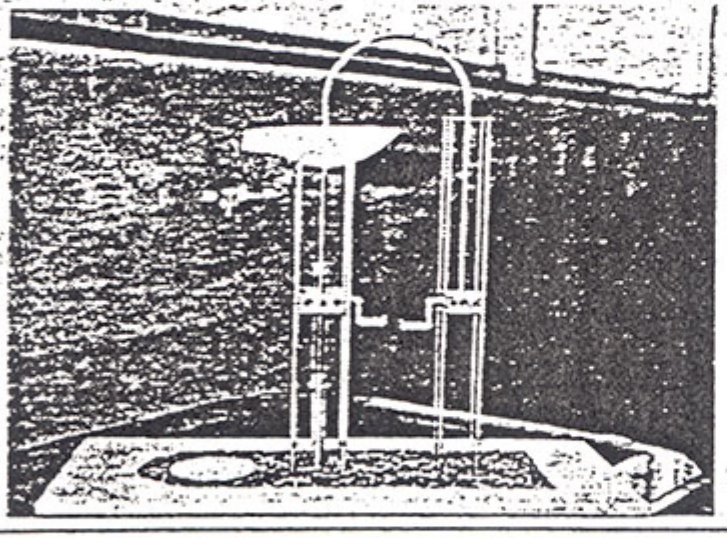
ユニーク4点決定

岩倉市の中心部を走る市道・新柳通線に設置される「音のアート」の四作品が決まった。来年三月末までにお目見えし、市民らの目を楽しませる。

設置されるのは、西春町の山口良臣さん、岐阜県美濃加茂市の渡辺泰幸さんら県内外の四人の造形作家の作品。切り込みを入れた鉄に振り子状のばちを当てて音を発するものや、パイプ状の集音管で地上と地下の音を拾うものなど、ユニークな作品ぞろい。

音のアートは市が「音楽のあるまちづくり」を推進するため、シンボルロードに位置付けた同市栄町から大地町までの約一キロの新柳通線の整備にあたり、「音」を感じられるオブジェの設置を企画。設置過程に地域の理解と参加を意図して「コミュニティー」もテーマに加え、七、八年度で計八作品を整備する計画で昨年度の四作品が選ばれた。

選考は名古屋芸術大学の茂登山清文助教授を座長に美術や音楽の専門家や市議、市職員ら九人で組織する設置委員会が行い、今年は依頼した八人の造形作家の作品から選んだ。



選ばれた「音のアート」作品の模型

1996/11/12　中日新聞（尾張版）

何が聞こえるか

岩倉の市道新柳通線

「音のアート」新たに4点

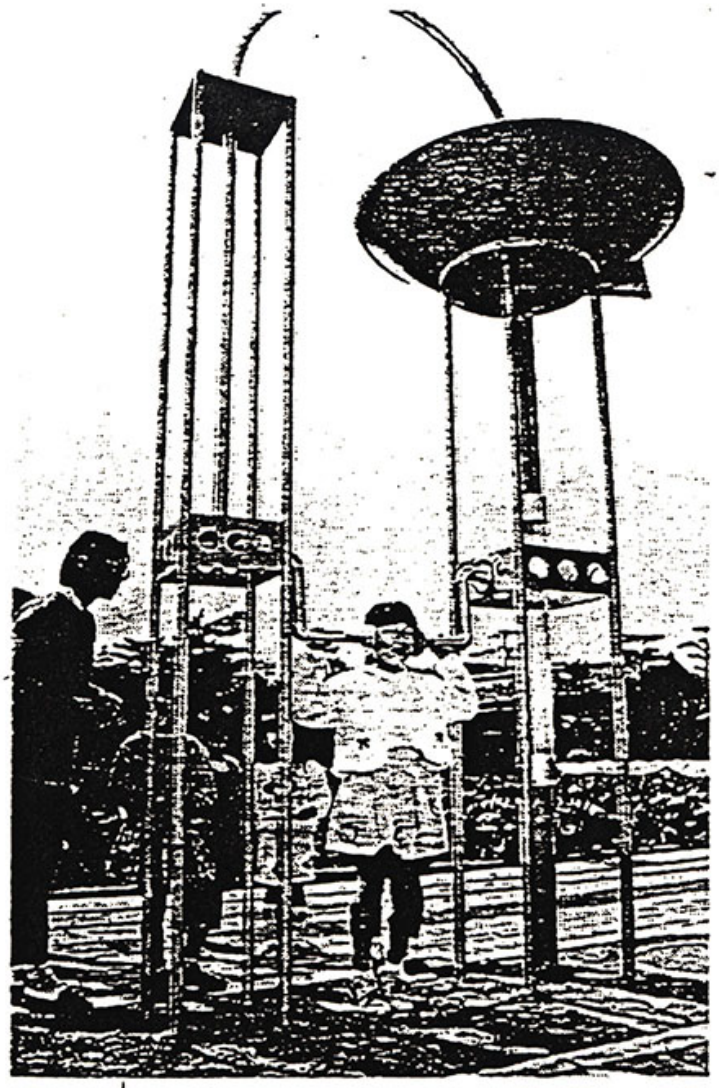
岩倉市の中心部を南北に走る市道新柳通線に、新しく「音のアート」と銘打った造形作品四点がお目見えした。

「音のアート」は、約一・六キロの同線のうち北側約一キロの区間で進められていたシンボルロード整備の一環。「音楽のある街づくり」を目指す同市らしさを出そうと、平成七年度に始まる四点が設置された。

新たに設置されたのは、西春町の山口良三さんら県内外の四人の造形作家の作品。パイプの先に付いたヘッドホンから上空と地中の音を聞く作品では、子どもたちが「何が聞こえるのかな」と不思議そうに試す姿も。また、切り込みを入れた鉄に振り子状のバチを当てて音を出すものなどユニークな作品が、道行く人の目を楽しませている。

音のアート設置と併せ歩道拡張も終わり、市が懸力ある道づくりとして約五億七千万円の事業費で平成四年から進めていたシンボルロードの整備は完成した。

外国製の街路灯が一基約二百五十万円することで今年一月の市長選では「無駄遣いでは」の批判もあったが、市では「計画段階とは時代も変わり反省点もあるが、市民参加で音のアートの作品作りも行っており、岩倉らしさを備えた景観として理解が得られている」と思う」と話している。



設置された「音のアート」造形作品で上空と地中の音を聞く子どもたち＝岩倉市大地町で

1997/4/2　中日新聞（尾張版）